

ご挨拶

海洋化学研究所 55周年秋季講演会に当たって

左右田健次*

海洋化学研究所はここに55周年を迎えました。55年前、日本は戦に破れ、それまでの指標も権威も消え去り、戦勝軍の占領下に世の中は大きな渦の中に漂っていました。住む家も食べる物も着る物も乏しく、生きていくこと自体が難しい日々でありました。しかし、その向こうには今までに無かった明るい何かがあるという希望と不思議な透明感に包まれた時代でもあったのです。海外では国際連合、ユネスコが発足し、原爆、水爆の開発競争と共に、英国や米国で発見されたペニシリン、ストレプトマイシンが数え切れない人々の命を救い始めていました。

この混沌の中にあって、海洋の化学的研究を目指し、財団法人海洋化学研究所を設立し、それを支えた先人たちの先見性と自信に脱帽せざるを得ません。それから55年、海洋化学研究所は発展、成熟、停滞、活性化など、人生にも比すべき幾多の時代を経てきました。自省すべきことは数々ありますが、小さな組織ながら多くの成果を挙げ、近隣学問領域との交流を促進し、この分野において、その存在意義は小さくなくなかったと思います。この規模の財団法人の研究所が年2回の講演会を催し、「海洋化学研究」誌を公刊してきたことは世に誇れるでしょう。これは表面的には華々しくない海洋化学の魅力的な世界に若き研究者を誘う事にもなったと思います。

創設より半世紀を越え、経済不況と不安定な社会において、海洋化学研究所は今、苦渋の中に再生と飛躍の道を探りつつあります。「草創と守成のいずれが難し」と言います。派手でなくとも前進を続け、海洋化学研究の世界において、キラリと光る存在でありたいと思います。これから半世紀後の海洋化学研究所の姿を夢に描きます。人生は長くても100年。一生と言わずとも、半生を海洋化学研究に捧げる若者の一人でも多く出ることを心に念じます。そして、この55年間、海洋化学研究所を支え、激励して下さった多くの方々に心から御礼を申し上げます。

* (財) 海洋化学研究所 所長